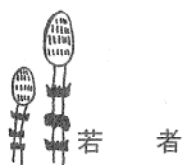


私 と 囲 碁



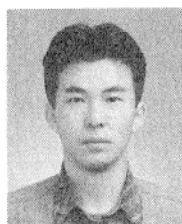
高野 英 樹*

私は、昨年の夏に行われた囲碁のアマチュア本因坊戦の全国大会で、幸運にも優勝することができました。これはアマ三大棋戦のうちの一つで、年に一回行われます。これまでは、7強と呼ばれる40代50代の人達が、20年以上優勝を独占していた状態が続き、大学生の優勝は初めてとのことでした。そういうわけで本欄への執筆の機会を頂きましたので、これまでの自分と囲碁について、簡単ですが振り返ってみたいと思います。最後までよろしくおつき合い下さい。

1. 長野で碁を覚える。

私が碁を覚えたのは、小学2年ぐらゐの時でした。碁好きの父に「お前もやってみろ」といった調子で言われ、毎週日曜日の午後にやっていました。私は小学1年の時に、急性腎炎という重い腎臓病にかかってしまい、学校も行けず半年以上寝たきりでした。そのためあまりスポーツもできないので、碁を教えてくれたそうです。

父はアマチュア3段程度の実力で、覚えてたの頃は、どんなにハンデをつけてもらっても負けていました。その度に、「お前は考えが甘い」とか「まだまだだな」とか言われるのが癪で泣いたりしたこともありましたが、それでも碁を続けていたのは、自分でも少し不思議です。父との対局の他は、父の買ってきた初心者用の本をたまに読むくらいでした。



*Hideki TAKANO
1970年5月8日生
1995年3月、大阪大学基礎工学部
化学工学科卒業見込

2年ぐらゐたって3級ぐらゐの強さになると、同じ相手ばかりで飽きただろうと、当時住んでいた長野市駅前の天狗道場という碁会所に連れていってくれました。碁会所というのは、30代でも若い方といった感じで、ほとんどがおじさんです。そんな中で、小学4年ぐらゐの子供はかなり目立っていたようです。お菓子やチョコレートなどをもらって、食べながら対局していたのを覚えています。その調子で、小学5年の夏に父の転勤で東京に移るまで、週末の碁会所通いは続きました。

その頃通っていた長野市内の小学校は、担任の先生がものすごく呑気な方で、生徒と一緒になつてくつろいでいました。今日は野球、明日はベーゴマ大会と毎日のように授業そっちのけで遊んでました。学校から帰っても日が暮れるまで外で遊んでいて、とてもものどかな毎日だったような気がします。

碁会所通いの成果がでて、小学5年の夏に東京に移るころには、アマ二段ぐらゐになっていました。その夏に、少年少女囲碁大会という小・中学生それぞれの日本一を決める大会に初めて出場しました。今まで多くの大会に出場しましたが、この時の事は特に強く印象に残っています。長野県予選の会場はとても遠くて、車でわくわくしながら行きました。小学生の部は10人ぐらゐで、2位に入って全国大会に出場することになりました。

全国大会は、東京の広いホールで小・中学生計200人ぐらゐが一斉に対局するので、けっこう壮観でした。何回か勝ったものの、ベスト16で負けました。2段程度の実力からするとうまうまいった方だと思います。翌日のベスト8から決勝までは、NHKに会場を移して録画されながら行なわれます。私は直前に負けてしまった

ので、その対局を横目でみながら、会場の隅で下にべこんと座って、大会の参加賞としてもらったペン碁を使って負けた者同士で対局してたのを覚えています。ペン碁とは小さな黒板の上に書いたり消したりしていく物で、消す時に横の消してはいけない所まで消してしまったりして、かなり面倒な道具です。ペン碁を地べたに座って対局している私達と、ライトに照らされ録画されながら打っている勝ち残っている人達。この好対照がおわかり頂けるでしょうか。でも私達はそんなことは気にせず、前日初めて会った仲間と楽しくやっていました。これが今までで一番懐かしい思い出と言えるでしょうか。

2. 東京で緑星学園に入る

東京に移ると、小・中学生対象の囲碁教室に少しの間通いましたが、強い人がいなかったのでもの足りませんでした。新しく通う所を探している所へたまたま見つけたのが緑星学園です。何かの囲碁雑誌にのっていて、歩いていける所にあったので、軽い気持ちで行ってみました。するとそこは、今まで行った所とは別世界のようなとても厳しい所でした。小学生から大学生ぐらいを対象とした囲碁道場で、よく来る人は20人ぐらいでしょうか。学校が終わるとみんな集まってきて、帰るのは10時ぐらい。学校のない日は朝から晩までといった調子で、週に4日ぐらい行きました。道場ではひたすら正座で、黙々と練習しなければなりません。私の場合は正座がきつくて、困りました。家に帰ってもまだ痛む足をさすりながら、とんでもない所に入ってしまったと思ったものです。

でも、楽しい所もけっこうありました。先生がいる間はみんな黙々と碁盤の前で練習していますが、いなくなったらもう目茶目茶でした。小学生を中心に、プロレスごっことかぞうきん投げとかして暴れてました。1個のチョコを巡ってけんかになったこともありました。しかし、そのうちに先生が帰ってくると大変です。4の字固めも一時休戦して、自分の碁盤の前に戻ります。先輩もあぐらから一瞬のうちに正座にチェンジします。急に静かになり、碁石を置く音だけがパチリと聞こえてきます。その後お約束の

ように先生の怒声「こらー」

私は入りたての頃は行儀が悪く、先生からは“長野の山猿”と呼ばれていました。なんでも、最初に行った日に、試験対局を先生の前でやった時の事です。始めは一応正座しておとなしくやっていたのが、だんだんと調子がでてきて、いつのまにか背中を丸めてあぐらに変わってるし、いきなり碁石をたくさん握って両手でじゃらじゃら振り出すはと、田舎のおやじ丸だしだったそうです。

なんだかんだと楽しく緑星学園に通っている間に、囲碁の方は急に上達してきました。緑星学園に入った最初の1年(小学五年の夏からの1年間)が、今までで最も上達したような気がします。その勢いで、小学六年の夏の少年少女大会で全国優勝してしまいました。昨年がベスト16ですから、自分でもびっくりです。決勝ではテレビに出ながらやっていたりするのに、不思議と緊張しなかったような気がします。あまりにうまく行きすぎて、実感が湧かなかったのでしょうか。初めて優勝したのに、この時の事はほとんど覚えていません。

緑星学園に通っていた小・中学生の人は、早い時期からプロを志望している人が多く、すでにプロになっている人もいました。私も少年少女大会に優勝したこともあり、プロを勧められました。超一流のプロの人は、ほとんどの人が15歳ぐらいまでにプロの試験に合格しています。プロを志望するなら今しかない、という感じでした。しかし私は、プロになりたいとは思いませんでした。自分でもよく分かりませんが、周りのプロやプロ志望の人達を見て、しんどそうに見えたのかもしれない。結局、中学受験をして、私立の早稲田中学に通うことになりました。

中学に入っても、相変わらず週4日ぐらいは緑星学園に通っていました。試験前は10日間程試験勉強という名目でお休みをもらってましたが、全然勉強せず、一夜漬けが定盤でした。逆に夏休みとかになると、週5日程朝から晩までになるので、けっこうハードでした。緑星学園は前より厳しくなって、昔みたいに息抜きできなくなっていました。休み中は一日中正座と

いうことになり、対局相手とでなく足と格闘することもしばしばでした。

そのまま、高二まで緑星通いは続きました。緑星学園が厳しくなったこともあり、わりと淡々と過ぎていった気がします。中学・高校それぞれの日本一を決める大会にも毎年出場し、中学で2回、高校で1回優勝しました。

高三になると、受験勉強ということで、緑星学園はお休みすることになりました。東京に住んでいたくせに、高三の5月には、大学は関西にしたいと考えていました。ただ1人暮らしがしたかっただけという話もありますが、それで、物理がまるで駄目だったため、2次に理科のない阪大基礎工後期を第1志望にしました。当時関東では、明石家さんまが赤丸急上昇で、さんまの方言とキャラクターが標準的関西人というあやしい説もありました。私は友人から、「もうかりまっかとぼちぼちでんがなは基本だぞ」という有り難いアドバイスを頂戴して、大阪へやって来ることになります。

3. 大阪での大学生活

大阪に来ると、当然緑星学園にも行かなくなるわけで、一転してマイペースになりました。上達しようと意欲は持ち続けてますが、特にこれと言った練習はしていません。学生やアマチュアの大会での対局が中心で行った感じです。けれども、碁に対する環境や自分自身が変化したことにより、碁について以前とは違った視点ができるようになった気がします。そのことが今回の好結果につながったように思います。

学生生活は、留年したこともあって長かったですが、もうじき卒業となる予定です。今は、早く卒業を決定して安心したい、という気持ちです。入社後は、化学工学とは直接関係のない仕事に携わる可能性もあり、もっとしっかり勉強しておけば良かったと思ったりもします。

まとまりのない拙文となってしまいましたが、以上で終わらせて頂きたいと思います。

最後になりましたが、本欄への執筆の機会を与えて頂きました基礎工学部化学工学科教授駒沢勲先生に深く感謝致します。

